〈花かつみ〉考

――『万葉集』六七五番歌の検討――

長見菜子

はじめに

『万葉集』巻四に、「中臣女郎が大伴宿禰家持に贈る歌五首」という歌群がある。本稿では、この歌群の冒頭に置かれた、六七五番歌の第三句〈花かつみ〉の実体について検討する。〈花かつみ〉は花の名称であり、優美な花であると世間に知られていたが、古来より現在までその実体は不透明である。

花かつみに関する近年の論に、升田淑子氏の「万葉思ひ草二――をみなへし幻想――」がある。[注1] 後世の能因や松尾芭蕉に焦点を当てた論文が多い中、升田氏は語の初出である『万葉集』六七五番歌を主軸に論を展開しており、大変参考になる。筆者も升田氏に倣い、中臣女郎の和歌を主軸にして検討を進めていきたい。

一　これまでの見解

まず、〈花かつみ〉の語句の初出である、『万葉集』六七五番歌を挙げる。[注2]

をみなへし　佐紀沢に生ふる　花かつみ　かつても知らぬ恋もするかも

娘子部四　咲沢二生流　花勝見　都毛不知　恋裳揩可聞

実体に関する説は、概ね〈花菖蒲説〉と〈真菰説〉に分類できる。[注3] 本稿でも、この分類を基準にして検討する。

六七五番歌を検討する前に、先行して当該歌の第五句を確認しておきたい。

第五句は【恋裳揩可聞】と表記されている。「恋」は正訓字、「可聞」は音仮名である。「揩」には「搨（トウ）（うつす、する）」字の書き間違いに基づく、「する。こする。」という日本独自の

意味があり、[注4]第五句ではその意で用いられている。

しかし、六七五番歌の「摺」には異同が見られ、『新編日本古典文学全集』や『萬葉集釋注』等は「揩」、『萬葉集全注釋』は「楷」となっている。現存する最古の写本「桂本」には「摺」とあり、『萬葉集全歌講義』等の全集本でも同字が採用されているため、「摺」字も他字と同様に蓋然性があると思われる。

「摺」の字義通りに考えれば、第五句は「裳を摺る」という熟語とも読み取れる。「摺」を原文に含む万葉歌は四首あり、六七五番歌以外は皆「衣を摺る」「摺り衣」と、「衣」と共に用いられている。

「摺衣」は「染草で種々の模様を摺り出した衣服」のことを指しているが、関連する語として、摺衣と同様の意義で使用されている「摺り裳（「草木の汁で、さまざまな模様を摺り出した裳」）[注5]」が注目される。

「裳を摺る」という表現は、『万葉集』において六七五番歌以外に見られないが、「衣を摺る」の寓意のように、恋情を表現する一要素として、この漢字が使われた可能性は否定できない。本稿でも「摺」字を前提として、考察を進めていく。

二　〈真菰説〉の検討

まず、〈真菰説〉から検討していきたい。真菰説を採る一例に、『今鏡』所収の話が挙げられる。[注6]

〔三六三〕五月花がつみを葺く事

陸奥守橘為仲と申す、かの国にまかり下りて、五月四日、館に庁官とかいふ者、年老いたる出で来て、菖蒲葺かするを見ければ、例の菖蒲にはあらぬ草を葺きけるを見て、「今日は菖蒲をこそ葺く日にてあるに、これはいかなるものを葺くぞ」と問はせければ、「伝へうけたまはるは、この国には、昔五月とて、菖蒲葺くことも知り侍らざりけるに、中将の御館の御時、『今日は菖蒲葺くものを、いかにさる事もなきにか』とのたまはせければ、『国例にさる事侍らず』と申しけるを、『五月雨のころなど、軒の雫も菖蒲によりてこそ、いますこし見るにも聞くにも、心すむことなれば、はや葺け』とのたまひけれど、『これ国には生ひ侍らぬなり』と申しければ、『さりとても、いかでかなくてはあらむ。浅香の沼の花かつみといふものあり。それを葺け』とのたまひけるより、こもと申すものをなむ葺き侍る」とぞ、武蔵入道隆資と申すは語り侍りける。もししからば、「引く手もたゆく長き根」といふ歌、おぼつかなく侍り。

この類話は『無名抄』などにも見える。竹鼻績氏は、「隆資からの伝承であることは『今鏡』の記載にのみ見え」、また「『橘為仲集』（乙本）や『勅撰作者部類』からうかがえる隆資と為仲（一〇七六年陸奥国赴任）の交流とその年次から、このような話が交わされていた蓋然性はある」と指摘している。[注7]

まず、五月四日という日付があることに注目したい。宮中で

は「菖蒲葺き」という「五月四日の夜、端午の邪気を祓うため、家々の軒にショウブをさす」[注8]行事が執り行われるが、『今鏡』の作者はこの行事と花かつみに関連性を持たせる意図があったようである。

『今鏡』は陸奥国で行われる菖蒲葺きを、藤原実方の逸話として語る。陸奥国には菖蒲が存在しないことを知ると、実方は〈菖蒲の代わりに花かつみを葺け〉と進言する。そこで〈こも〉が登場し、菖蒲に準ずる代用品として取り扱われる。

『今鏡』ではショウブのことを「あやめ」と表記している。現代の区分に照らすと齟齬があるが、当時はあやめといえば現在の花菖蒲でなく、サトイモ科の葉菖蒲を意味した。葉菖蒲と菰は見た目が似ていることから、作者は〈菖蒲（現在のサトイモ科葉菖蒲）〉に比される菰を〈花かつみ〉と表したのだろう。

文章通りに受取ると、実方は花かつみを菰と認識していたことがうかがえる。現在もそうだが、当時の端午の節句に用いられるのは、アヤメ科の花菖蒲ではなく、サトイモ科の葉菖蒲であり、花菖蒲とは異なる様相の植物である。

ちなみに『今鏡』の作者が菰説を収録したのは、菰説の先鋒である能因法師の影響だと考えられる。竹鼻氏は『今鏡』の作者として〈藤原為経〉を提案しているが、能因は為経の親類である、藤原実綱に随行した従者であった。

以前、拙稿[注9]において、〈藤原実政〉を『大鏡』の作者の候補に据えて考察した。実綱は、その実政の実兄にあたる人物である。

類話の比較検討の結果、『今鏡』の作者が先祖に配慮して物語を製作し、必要に応じて内容を改変した痕跡があることが分かった。為経には、実綱に近しい能因が唱道する説を否定できなかったのではないだろうか。

能因は、肥後守橘永愷の息子で、『後拾遺和歌集』や『新古今和歌集』など、多くの勅撰集に名を残した和歌の大家であり、十一世紀の半ばまで活躍した。能因は、著作『能因歌枕』[注10]において「こもをば　かつみといふ」と解釈している。

平安時代の〈あやめ〉は葉菖蒲（サトイモ科）を、現代の名詞〈あやめ〉はアヤメ科アヤメ属の花を指すように、時代により指す物が変化する場合がある。〈あやめ〉と〈しょうぶ〉の変遷も確認したい。

『能因歌枕』の「しやうぶをば、あやめ草といふ」という記述からは、平安時代後期、既に菖蒲の読みが〈しょうぶ〉へ変化していた様子がうかがえる。小林祥次郎氏が「あやめ　――季語遡源――」[注11]において、

さうぶ取れるところ、またかせざるもあり。
あやめぐさ根長き取れば沢水の深き心は知りぬべらなり（貫之集・二二七）

五月、さうぶ葺く家にほととぎす鳴けり。
声立てて今日しも鳴くはほととぎすあやめ知るべきつまやなるらむ（落窪物語・三）

藤侍従、五月五日、まろなるしやうぶやるとて

駒だにもすさめずといふあやめぐさかかるは君がすさびとそ聞く（義孝集・三八）

同じころ、しやうぶの香のすずろにすれば

ほととぎす忍びの声も聞こえぬにまだきもこゆるあやめぐさかな（和泉式部集・六九五）

などから考えると、古典の世界では、アヤメとサウブ・シヤウブとは同じものであったようである。

（傍線は私に付した）（引用文献を強調する場合は、以後同様の措置をとる）

と言及しているように、平安時代前期には、「あやめ＝しょうぶ」と理解されていた事実がある。しかし『万葉集』には〈あやめぐさ〉はあるが、〈しょうぶ〉という言葉は存在しない。

すなわち、〈しょうぶ〉という呼称は、平安時代に出現したことになる。名称の混同期を経て、いつの間にか〈菖蒲（あやめ）〉の呼称は〈しょうぶ〉へと変化していった。

呼称が分離した時期は、明確に特定できない。しかし、院政期前後で〈花あやめ〉や〈花しょうぶ〉という言葉が散見される点は注視すべきだろう。「和歌・俳諧ライブラリー」で検索した結果[注12]、〈花しょうぶ（さうぶ）〉の語句は俳諧含め三件あり、初出は西行の『山家集』であった。しかし、この言葉は桜が散る中で葺かれた葉菖蒲を喩えたもので、アヤメ科の花を指すわけではない。

対して、〈花あやめ〉の初出は慈円の『拾玉抄』に遡る。その後〈花あやめ〉が挿入された和歌は『大江戸和歌集』まで見受けられないことから、この名称が定着したのは江戸時代と考えられる。

しかし、『拾玉抄[注13]』に収められた二三二三番歌、

野沢潟雨や、晴れて露重み軒によそなる花あやめ哉

の歌意を見ると、慈円は〈花あやめ〉をアヤメ科アヤメ属の植物と考えていたようである。この事例は呼称が生まれる契機として注目したい。

また、〈あやめ〉という言葉は、和歌集では時代を通じて、サトイモ科の葉菖蒲を指していたようである。「いずれあやめかかきつばた」という文言があるが、原典とされる『太平記』の和歌は「五月雨の　沢辺のまこも　水こゑて　何れあやめと引ぞわづらふ[注14]」と、カキツバタに言及がない。加えて、「あやめ＝こも」という観点から和歌が詠まれており、『太平記』が編纂された時分は、あやめはこもと似た植物という認識のままであったことが示唆される。

現在に至る区分がいつからあったのか、詳細に特定することはできない。しかし慈円が〈花あやめ〉という呼称を用いている以上、花菖蒲の概念は、呼称はなくとも人々の根底にあったのではないか。

ところで、平安時代の歌人である源俊頼の『俊頼髄脳』には、次のような指摘がある[注15]。

かつみといへるはこもをいふなり。かやうの物も所にしたがひてかはれば、伊勢の国あしをば濱荻といへるが如くに、陸奥国にはこもをかつみといへるなめり。五月五日にも人の家にあやめをふかで、かつみふきとてこもをぞふくなる。かの国にはむかし菖蒲のなかりけるとぞ承りしに、このごろは浅香の沼にあやめをひかするは僻事とも申しつべし。

俊頼によると、〈かつみ〉は真菰の方言読みであったようだ。『日本方言大辞典』には、[注16]

かつみ［方言］（3）植物　まこも（真菰）。
陸奥※020／奥州※039／青森県津軽075／

との記載があり、他地域でも似通った菰の方言が散見されることから、蓋然性はあると考えられる。

また、同書〔かつみ〕の項には以下の用例が挙がっている。

［文献例］歌謡・鄙廼一曲
同じ（越呉）くにぶりくどき唄
「名主助市の、高田の内の、一枚田、二枚田、三枚田、四枚田、五枚目の三角田の、一本真菰（かつぼ）に、しっかとくっついたる、小蝦（つのがら）どのの」

この「くにぶりくどき唄」は「国振り（国風）」の一種で、デジタル大辞泉「風俗歌」の項には「古代、地方の国々に伝承されていた歌。平安時代、宮廷や貴族社会に取り入れられ、宴遊などに歌われた。国風（くにぶり）。国風歌。風俗（ふぞく）。ふうぞくうた。」との説明がある。[注17]

〈かつみ〉に類似した方言は、古代よりその読み方で伝承されており、この方言に準じる〈かつみ〉も、平安時代から陸奥地方周辺において、「かつみ＝こも」として認識されていたと推測できる。

『今鏡』の「五月花がつみを葺く事」を先に引用したが、訳者である竹鼻氏によると、「陸奥国の風習として、「かつみ葺き」という五月五日にこもを葺く風習があったことが『袖中抄』などによって確認できる」[注18]という。

実方の行動によって、陸奥国でかつみ葺きが行われるようになったのか、真偽は分からない。だが、小林氏の「平安時代には一般でも菖蒲・蓬を葺く風習があった」[注19]という指摘に鑑みると起源は相当に古く、実方を発祥とするのは、花かつみと菰を結びつけるための創作である可能性が高い。

ともかくも、陸奥国の方言である〈かつみ〉を、そのまま花かつみの〈かつみ〉と同一視した実方の伝承は、菰説が発展する契機になったようだ。

この伝承、もしくはそれに準じる解釈が生じた原因は、『古今和歌集』六七七番歌、[注20]

陸奥の　安積の沼の　花かつみ　かつ見る人に　恋ひや渡らむ（読人しらず）

に起因する。この和歌は『万葉集』六七五番歌を本歌にして創作されたものだが、六七五番歌にはない「陸奥の」という句が新たに挿入されている。この地名を元に、能因が現地で調査をし、方言の存在をふまえて〈花かつみ〉＝〈花菰〉と定義したのが、菰説が提起された直接的な契機ではないだろうか。

しかし、「陸奥の」と枕詞がある『古今和歌集』六七七番歌はさておき、奈良時代の中央貴族である中臣女郎が、当時治安の悪かった陸奥地方の方言を知りえた上、わざわざ歌に組み込んだ可能性は限りなく低いと考える。先に引用した「くにぶりくどき唄」が貴族社会に流入するのも平安期以降である。

また、鎌倉時代の仙覚が万葉六七五番歌を正しく解読するまで、六七五番歌の「かつみ」にかかるべき第四句、「かつても知らぬ【都毛不知】」は、「みやこも知らぬ」と誤読されていた背景がある。[注21]そのため『古今和歌集』六七七番歌の方が注目を集め、六七五番歌は省みられることがなかった。結果として、漢字表記の意味は廃れ、菰説が立つ要因となったと考えられる。

三　〈花菖蒲説〉――ノハナショウブとカキツバタ――

続いて〈花菖蒲説〉を検討していく。前述したように、上代・中古にかけて、〈あやめ〉という呼称は〈菖蒲（しょうぶ）〉を指していた。〈花菖蒲（はなしょうぶ）〉という言葉は浸透しなかったが、花自体は古くから日本に存在していたと考えられる。

花菖蒲説の中で特に有力なものが〈ノハナショウブ〉説である。筆者も、花の交配が未発達である奈良時代において、最も蓋然性があるだろうこの種を推定したい。花菖蒲の種は江戸時代に品種改良され広まったものが多数であるが、大元となったものは日本に自生していたノハナショウブである。ノハナショウブは同じアヤメ科のカキツバタとは似た箇所も多いため、特徴を表にまとめておく。なお、内容は全て『日本大百科全書』[注22]から引用した。

表を照合すると、花弁の色や開花時期などに若干の差異はあるものの、花弁・葉の形状や生息場所には殆ど違いがないと理解できる。まず注目すべきは開花時期である。ノハナショウブ、カキツバタともに春（旧暦では夏）に咲く花として認識されている。対して〈真菰〉項には、以下の説明がある。[注23]

8月から10月初めに大型でまばらな円錐花序（かじょ）が出る。花序の長さは50㎝余りで、多数の枝を分かって、やや密に無数の小穂をつける。小穂は単性で、雌雄ともに苞穎（ほうえい）がなく、1個の小花のみとなる。

花名	カキツバタ	ノハナショウブ
種族	アヤメ科多年草	アヤメ科多年草
葉の形状	葉は剣状、長さ 30 ～ 70 センチメートル、幅 2 ～ 3 センチメートル、先は少し垂れ、中央脈は不明、光沢はない。	葉は剣状で長さ 30 ～ 60 センチメートル、幅 0.5 ～ 1.2 センチメートル、中央脈が目だつ。
開花時期	花茎は高さ 50 ～ 70 センチメートル、分枝せず、5 ～ 6 月、先に 2 、3 花を開く。花は青紫色、径約 12 センチメートル。	6 ～ 7 月、高さ 40 ～ 80 センチメートルの花茎を出し、径約 10 センチメートルの赤紫色花を数個開く。
外花被片の形状	外花被片（がいかひへん）は楕円（だえん）形で長さ約 10 センチメートル、中央脈に沿って中央から下に黄色の斑（ふ）がある。	外花被片（がいかひへん）の弦部は広倒卵形で垂れ、長さ 5 ～ 7 センチメートル、中央より下に中央脈に沿って白色または淡黄色の斑紋（はんもん）がある。
内花披片の形状	内花被片は矛形で直立する。	内花被片は狭長楕円形、長さ約 4 センチメートルで、直立する。
分布場所	湿地や水辺に群生し、日本全土のほか、朝鮮、中国東北部、シベリア東部に分布する。古来、花汁を用いて布を染めたので書き付け花とよばれ、転化してカキツバタとなったという。	山地の草原や湿地に生え、日本全土、および朝鮮半島、中国東北部、シベリア東部に分布する。

菰が花を咲かせるのは、八月から一〇月にかけてであり、カキツバタ・ノハナショウブとは異なる。『今鏡』に所収された話の題名は「五月花がつみを葺く事」であり、もし〈花かつみ〉＝〈花菰〉であったとしても、花が咲いた状態の〈かつみ〉は秋にしかない。元から五月の行事〈かつみ葺き〉が前提としてあり、先導者の能因自身も『能因歌枕』において〈五月〉項に〈まこもぐさ〉を区分している。

つまり、かつみ（こも）は菰説が唱道された当時から五月の植物の認識であり、少なくとも「五月に花がつみを葺く事」という題名に関しては、菰の用いられる時期と花の咲く時期に相違があり矛盾している。

また、その認識に照らせば、中臣女郎と『古今和歌集』六七七番歌作者は、盛りを過ぎた秋に咲く小花をあえて注視し、〈花菰〉と規定して和歌を詠んだことになる。季語としても成り立たず、〈花かつみ〉を〈をみなへし〉に比して一際目立つ花とする歌意にも反している。

ところで、『万葉集』六七五番歌は《五月・六月を想定して作られた》歌であると筆者は考察している。その根拠となるのが、六七五番歌、第五句の【裳摺】である。この語を追究すると、カキツバタを詠んだ和歌との共通項がうかがえる。

〈カキツバタ〉を含む和歌は『万葉集』にも多々ある。該当歌を全て挙げる。

常ならぬ　人国山の　秋津野の　かきつはたをし　夢に見しかも　（巻七・一三四五）

住吉の　浅沢小野の　かきつはた　衣に摺り付け　着む日知らずも　（巻七・一三六一）

我れのみや　かく恋すらむ　かきつはた　につらふ妹はいかにかあるらむ　（巻十・一九八六）

かきつはた　につらふ君を　ゆくりなく　思ひ出でつつ嘆きつるかも（巻十一・二五二一）

かきつはた　佐紀沼の菅を　笠に縫ひ　着む日を待つに年ぞ経にける　（巻十一・二八一八）

かきつはた　佐紀沢に生ふる　菅の根の　絶ゆとや君が見えぬこのころ　（巻一二・三〇五二）

かきつはた　衣に摺り付け　ますらをの　着襲ひ狩する月は来にけり　（巻十七・三九二一）

これらの和歌には共通点があるため、詳細を確認する。まず、〈佐紀沢（沼）〉とあるように、カキツバタは水辺に咲く花である。ノハナショウブも湿地に咲く花であり、生息地が共通している。一九八六番歌や二五二一番歌には「かきつはたにつらふ」とあるが、原文には以下の漢字があてられている。

一九八六番　吾耳哉　如是恋為良武　垣津旗　丹頬合妹者如何将有

二五二一番　垣幡　丹頬経君叫　率尓　思出乍　嘆鶴鴨

他に、「につらふ」が用いられている歌の例として、一九一一番歌が挙げられる。

一九一一番　さにつらふ　妹を思ふと　霞立つ　春日もくれに　恋ひ渡るかも

左丹頬経　妹乎念登　霞立　春日毛晩尓　恋度可母

「さにつらふ」の意を、「新編日本古典文学全集」は、「さにつらふ―赤みを帯びた、の意か。「につらふ妹」（一九八六）という例もある。サは接頭語。ニは丹であろうが、ツラフの語性不明。ツラの原文に「頬」の字を用いたのは、頬紅を使用する化粧法がかなり一般的であったことを示すか。」と注釈している。

「丹」は赤土のことを指し、古代において赤く化粧をする際の顔料として用いられていた。原文と解説に鑑みると、〈頬が赤く染まっていること〉の比喩として和歌に使用されたようである。その例に漏れず、一九八六番歌・二五二一番歌も、頬が染まる様子を表している。

問題なのは、これらの歌で詠まれる女性の頬が、青紫の花であるはずのカキツバタに喩えられていることである。「新編日本古典文学全集」では、この矛盾を「今日いうかきつばたとの異同は不明」としている。

しかし『日本国語大辞典』や『全文全訳古語辞典』の〔杜若〕の項には、「濃紫色、紫の花」と説明があり、前掲した表と照合すると、特徴としてはノハナショウブの項に当てはまる。

また『色の名前』では、「「杜若色」は、菖蒲色（現在のアヤメ）よりも赤みの強い紫を指し、その華やかな色から美人の形容に用いられ、「丹つらふ（赤みのある美しい色の意）」にかかる枕詞」と説明されている。[注24] 以上に鑑みると、万葉時代のカキツバタは青紫色ではなく、赤紫色の花であったと考えるべきだろう。

要するに、古代においては花の分類が曖昧だったため、ノハナショウブとカキツバタが混同され、同じ花として認識されていたのではないだろうか。かなり時代は下るが、先に触れた「いずれ菖蒲か杜若」という文言もある。

考察を裏付けるものとして、以下の和歌を取り上げたい。[注25]

詞書：藤原のかつみの命婦にすみ侍りけるをとこ、人の手にうつり侍りにける又のとし、かきつはたにつけて

かつみにつかはしける

いひそめし昔のやとの杜若色はかりこそかたみなりけれ

（『後撰和歌集』一六〇番歌　良岑義方朝臣）

良岑義方は平安時代の官吏である。[注26] この和歌は『後撰和歌集』に収録された、菰説が提唱される以前の作品である。

まず、詞書に着目する。「良岑義方が〈藤原のかつみの命婦〉に、〈かきつばた〉に文を添えて送った」と記されている。「〈かつみの命婦〉がいなくなった家の〈かきつばた〉、この〈色〉だけが名残である」。つまり〈かつみ〉という名前は、カキツバタの色に喩えられるものであったことが示唆されるのである。色という語には多々意味があるが、いずれにせよ様子が類似していたことがわかる。

『後撰和歌集全釈』に「「初め」に「染め」を掛ける」と言及があるように、書付花としてあえてカキツバタが選択された可能性も考えられる。木船重昭氏が「義方が贈ったかきつばたが、実際に〈昔の屋戸の杜若〉だったわけではない」[注27] と指摘していることからも、かつみの命婦の喩えとして詠まれる花をカキツバタにする必要性があったと推測される。

また、『堀河院百首』二二五七番歌にも、花かつみが詠み込まれている。[注28]

はなかつみ　ましりにさける　かきつはた　たれしめさして　きぬにするらむ

『堀河院百首』の成立は、『能因法師集』『能因歌枕』よりも後年になる。「和歌文学大系」の意訳「花かつみにまじって咲いている杜若を、誰がわがものとして標をめぐらし、衣に摺り染めをするのだろうか。」に鑑みると、〈花かつみとカキツバタが混合された〉こと、〈共に絹に摺られるものとして認識された〉ことがわかる。後者の詳細は後述するが、カキツバタとノ

ハナショウブの〈色〉と〈書付花の役割〉が重複していたのは明瞭である。

最後に、一三六一・三九二一番歌の「かきつはた衣に摺り付け」を検討する。これは〈カキツバタの花汁を衣に摺りつけて衣装を染める行為〉を意味し、「新編日本古典文学全集」は、「この摺ルは摺り染めにすること。布の上に型紙や型木を当て、その上から染料を付けた刷毛で摺って模様を染め出す、いわゆる捺染をいう。」と注釈している。[注29]

この表現は、前述した第五句の【裳摺】との類似性が指摘できる。カキツバタとノハナショウブが近い種であった以上、似た花を用いた女郎が、【裳摺】という女性的な衣装の表現へ改称したとも考えられるのではないか。平安時代にはこの語が定着していることからも、女郎が意図を込めて創作した可能性は否定できない。

また、三九二一番歌の背景にも着目したい。「かきつばたで衣を擦り染めにし　ますらおが　着飾って狩をする　その月は来た」[注30]という内容から、薬狩を行う月初めの様子がうかがえる。「薬狩」とは何か。福島千賀子氏は、「中国の民間習俗を纏めた『荊楚歳時記』には、五月五日を節として、摘み草をする神事・儀礼が行われていたと記述があり」、「日本における「薬猟」の行事は、「中国の薬摘み」と「高句麗の鹿猟」、そして「魂ふり」等の日本古来の風習が習合し生まれた宮廷儀礼であって、この「薬猟」が端午の節句の行事と重なり、引き継がれていった」と指摘している。[注31]

三九二一番歌で、カキツバタが薬狩と併記され詠まれているのは、カキツバタが菖蒲と同じく旧暦五月に咲く花であり、カキツバタで染めた服を纏うことによって、身を守ることができると考えたからだろう。

ところで福島氏は、「実際に暦の上で両者の一致を見ない年は、五月五日即ち夏至と見なして薬猟が挙行されたものと思われる」と、五月五日と夏至の関係性についても言及している。[注32]表と照合すると、カキツバタは陽暦五～六月、ノハナショウブは六～七月にかけて開花する。夏至の荒れた天候で茂る菖蒲と似た環境で花を咲かせるのは、カキツバタではなく、どちらかと言えばノハナショウブではないだろうか。

以上、カキツバタとノハナショウブに関して考察したが、これらには、あらゆる点においてほぼ差異がないことが確認できた。薬狩の時期に当てはめても、開花時期は両者ともに重なる部分があり、混同されていたとしてもおかしくない。

たとえ中臣女郎がカキツバタとノハナショウブを区別していたとしても、〈衣摺〉に類似した〈裳摺〉という語を用いている時点で、花かつみにカキツバタの能力・用法を重ねていた可能性は高い。

また、『後撰和歌集』一六〇番歌において、良岑義方が〈かつみの命婦〉を花かつみになぞらえているのは明白である。この和歌が、菰説が提唱される以前の創作であることも注視される。

更に、『歌ことば歌枕大辞典』〔杜若〕の項には、「『万葉集』

から『後撰和歌集』頃までは夏の歌として詠まれるが、『堀河院百首』以後は春の歌題とされた。」とある。[注33] 検討した二五七番歌は「杜若」歌群の筆頭に置かれており、類語として〈花かつみ〉も春の季語と規定されている。

少なくとも『堀河院百首』が詠まれた場において、花かつみが春の植物であることを否定する者はおらず、カキツバタが春の季語であるという概念が、現代に至るまで主流であることをみても、花かつみを考察する上で非常に重要な和歌であると考えられる。この点を考慮すれば、〈花かつみ＝花菰〉である可能性は、花が咲く季節の不一致により、否定できるといえよう。

以上の考察をふまえ、筆者は、中臣女郎は『万葉集』六七五番歌の〈花かつみ〉を旧暦五・六月に咲く花として設定していたと主張したい。よって、新暦八月～一〇月（旧暦七～九月）にかけて咲く菰の花は対象外となり、〈花菖蒲説〉が正当な説であると推測できる。女郎がカキツバタとノハナショウブを明確に区別しておらず、花かつみがカキツバタを指していた可能性も残るが、少なくとも、元来の〈花かつみ〉がアヤメ科アヤメ属の花であることは明瞭ではないだろうか。

対して『古今和歌集』六七七番歌は、〈陸奥国〉と歌枕が入っている分、方言〈かつみ〉を用いて創作した可能性は残る。しかし前述したように、イネ科である菰の花は小さく地味なもので、群衆の中で一際目立つ女性の比喩としてはふさわしくない。

推測だが、『古今和歌集』六七七番歌の〈花かつみ〉は、〈かつみ〉部分を菰の方言として組み込み、かつそれを形状が似た〈葉菖蒲の葉〉として捉えていたのではないか。花菖蒲は〈花のある菖蒲〉、すなわちサトイモ科の菖蒲と葉の形が似通っている。そして菰の葉も菖蒲の葉と類似する形状（剣状）である。

〈陸奥〉を歌枕として、葉部分を〈かつみ（菰）〉で代用し、擬似的な花菖蒲を創作したのが、『古今和歌集』六七七番歌の〈花かつみ〉ではなかったかと筆者は考える。澤潟久孝氏も、「穂の出た菰を「花――」と呼んだとは考へ難い。特に「花」と冠する以上は、あやめ（一二・四二三）に対する花あやめのように、かつみが菰だとしたら、花かつみは、菰に似てしかも花の咲くもの、即ちやはり花あやめ（今いふあやめ）か花菖蒲（共にあやめ科の植物、萬葉のあやめは今の菖蒲でさといも科の植物）といふ事になりそうに思はれる。[注34]」と言及し、花かつみの〈かつみ〉を菖蒲の葉と擬したものと推定している。

『今鏡』〔三六三〕節の、「陸奥国に菖蒲がない」という話が真実であるならば、陸奥国に赴任した中央府の人間が、現地の花菖蒲を喩えるのに菖蒲の葉と似た〈かつみ（こも）〉を代用して、〈花かつみ（花＋菖蒲なのだが、その概念が陸奥国にない）〉＝〈花菖蒲〉として創作した可能性は考えられる。

『古今和歌集』の〈花かつみ〉は、方言〈かつみ〉を掛けた〈花菖蒲〉であるかもしれない。しかし、筆者は『万葉集』の〈花かつみ〉は方言とは関係なく、額面通りに花菖蒲を指していたと主張したい。

先述したが、『万葉集』六七五番歌は仙覚が考察するまで、第四句【かつてもしらぬ】が【みやこもしらぬ】と誤読されて

いた背景がある。しかし、六七五番歌を模倣した『古今和歌集』六七七番歌は【かつてもしらぬ】と解読していることから、『古今和歌集』六七七番歌が創作された年代までは、中国六朝時代の漢文知識が生きていたとみえる。

すると誤読の原因は、六七七番歌が〈陸奥国〉という歌枕を挿入したことに始まるのではないか。陸奥国は都から遠く隔たった地域である。六七七番歌の作者は〈都〉をどう解釈するのか逡巡し、もしくは故意に仕組んで〈かつて〉と〈みやこ〉、どちらの意味でも受取れるように、和歌の舞台を陸奥国に設定したと推測できる。

また、『万葉集』六七五番歌の「をみなへし」という語句は、奈良時代には鄙の象徴として捉えられていた。升田淑子氏は、「中臣女郎は言葉の伝達者・伝承者として鄙の文化にも関心を寄せる女郎」であると推測している。[注35] そうであるならば、中央貴族であっても〈をみなへし〉を用いて和歌を創作することに抵抗はなかったであろう。【みやこも知らぬ】という誤読は、〈をみなへし〉が鄙であるという寓意を持つため、違和感なく解釈できてしまった結果であるともいえる。

すなわち、『万葉集』の〈花かつみ〉と『古今和歌集』の〈花かつみ〉は、狭義的には作者の想像・意図する根本的な認識の違いから、別物であるといえよう。しかし広義的には、『万葉集』『古今和歌集』どちらの花かつみも、アヤメ科アヤメ属の花菖蒲類であることに相違ないのではないか。

おわりに

最後に、以上の考察をふまえて、中臣女郎の実像を推察したい。六七五番歌は、歌群「中臣女郎が大伴宿禰家持におくる歌五首」の冒頭歌である。以下、六七五番歌を含めた五首を挙げる。

をみなへし　佐紀沢に生ふる　花かつみ　かつても知らぬ恋もするかも

娘子部四　咲沢二生流　花勝見　都毛不知　恋裳摺可聞

海の底　奥を深めて　我が思へる　君には逢はむ　年は経ぬとも

海底　奥乎深目手　吾念有　君二波将相　年者経十万

春日山　朝居る雲の　おほほしく　知らぬ人にも　恋ふるものかも

春日山　朝居雲乃　欝　不知人尓毛　恋物香聞

直に逢ひて　見てばのみこそ　たまきはる　命に向かふ我が恋止まめ

直相而　見而者耳社　霊剋　命向　吾恋止眼

否と言はば　強ひめや我が背　菅の根の　思ひ乱れて　恋

ひつつもあらむ
不欲常云者　将強哉吾背　菅根之　念乱而　恋管母将有

これらの和歌を確認すると、〈佐紀沢〉〈春日山〉など、序詞に奈良の地名が用いられている。伊藤博氏は、「中臣女郎の歌五首は「流下型対応構成」にあてはまる」と指摘しており、[注36]その点を加味すると、中臣女郎は和歌の舞台を〈奈良〉に設定していたと推察できる。やはり、六七五番歌〈花かつみ〉が陸奥国の方言に準じたものであるとは考えにくい。

また〈花かつみ〉という語句はこの和歌が初出であり、六七五番歌以前にも同語は見受けられない。すると、この言葉は中臣女郎の造語という可能性が高くなる。

しかし、歌を贈られた家持は『万葉集』に深く関わった人物であり、和歌集に載せる単語の理解は必須である。また作者本人も、関係者である家持に、曖昧な造語を付した和歌を贈ることは出来かねるだろう。

『萬葉集全歌講義』において、阿蘇氏は中臣女郎の父親候補を数人挙げ、「〈中臣〉意美麻呂の孫の世代に家持に相聞歌を贈る女性がいてもおかしくない」と指摘している。[注37]また中西進氏は、中臣女郎の親類を「中臣といえば万葉の資料保管にさえ関係をもつかとも思われる右大臣大中臣清麿が推定される」と言及しており、[注38]その指摘を加味すると、〈中臣清麻呂〉が中臣女郎の父であった可能性が高いと考えられる。

清麻呂は妻が丹治比氏であることで家持と親戚関係にあり、後に右大臣にまで昇進し、万葉集の編纂にも助力したとおぼしき重要人物である。[注39]『万葉集』巻二〇には、清麻呂宅で家持含む数人が宴を催す様子や故聖武天皇を偲ぶ和歌が収録されており、家持との親密な関係性がうかがえる。

彼の娘であれば、家持が無碍にできない存在である上、清麻呂宅で何らかの接点があってもおかしくない。生没年が明確である清麻呂の子息に中臣諸魚（七四三―七九七）がおり、次男中臣子老の没年が七八九年であることも加味すると、七三〇～七四〇年代前後に清麻呂の子息が多く誕生しているといえる。同年代に女郎が誕生していた可能性も高い。

もしそうであるならば、養老二年生まれである家持と中臣女郎は、相当に年齢が離れている。[注40]政略結婚でもない限り、中臣女郎が恋愛感情を家持に抱く事も、その逆も無いと考えた方が自然である。

事実、『尊卑分脈』によると、大中臣（元・中臣）清麻呂女は藤原巨勢麻呂の子息、瀧麻呂と婚姻しており、この女性が女郎と同一人物であるとすれば、彼女は藤原家に嫁いだものとみえる。[注41]嫁ぐ相手を想い和歌を詠んだとすると、家持が返歌をしないのも道理である。

しかし、親しい友人の娘であり、恋愛感情がないからこそ〈花かつみ〉という造語を家持は理解し、造語を含む六七五番歌を許容したとも考えられる。『万葉集』巻十七～二〇は、家持の「歌日記」と呼ばれるほど私情が色濃い。[注42]同じく第四期の人間で、家持と親しい関係性であれば、妥協が通ることもあったか

もしれない。

以上は推測の域を出ないが、〈花かつみ〉が造語であるならば、彼女が清麻呂の娘という立場にあるのが、最も蓋然性が高く、違和感も無いと思われる。また、『万葉集』の成り立ちや保存を考えても、清麻呂ら中臣氏が及ぼした影響は看過できない。研究課題として、検討を続けたい。

注

1　升田淑子「万葉思ひ草　二　――をみなへし幻想――」『学苑』七六八号　昭和女子大学　二〇〇四年十月。

2　小島憲之　木下正俊　東野治之「新編日本古典文学全集」『萬葉集①』小学館　一九九四年。巻四・三四一頁より。以後、注記の無い場合、万葉歌は「新日本古典文学全集」『萬葉集』から引用する。

3　近年の注釈では『新日本古典文学全集』、『萬葉集全注』（木下正俊『萬葉集全注』巻第四　有斐閣　一九八三年。三〇七、三〇八頁）、『万葉集全解』（多田一臣『万葉集全解』2　筑摩書房　二〇〇九年。一二六頁）、『萬葉集全註釋』（武田祐吉『萬葉集全註釋』五　巻の四・五　角川書店　一九五七年。二六〇、二六一頁）、『萬葉集注釋』（澤瀉久孝『萬葉集注釋』巻第四　中央公論社　一九五九年。四五一～四五六頁）、『萬葉集釋注』（伊藤博『萬葉集釋注』二　集英社　一九九六年。五九五～五九九頁）。古い研究では『花かつみ考（藤塚知明）』（藤原知明著・奈良女子大学学術情報センター蔵、国文学研究資料館「日本古典籍総合目録データベース／館蔵和古書目録データベース」所収『花かつみ考』国文学研究資料館。）などが〈花菖蒲説〉を主張し、対して『古事類苑』（『古事類苑』植物部　洋巻・第一巻　株式会社東京築地活版製造所　一九一一年。九三〇頁）、『萬葉集全歌講義』（阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』第二巻　笠間書院　二〇〇六年。六九〇～六九四頁）、古くは『能因歌枕』（佐佐木信綱『日本歌学大系』第一巻　文明社　一九四〇年。所収、『能因歌枕』。一二四頁）などが〈真菰説〉を主張している。また、本稿では〈真菰説〉を検討する際、〈真菰〉もしくは〈菰〉と表記が都度変動するが、植物としては同義である。

4　諸橋轍次『大漢和辞典』巻五　大修館書店　一九六七年。三七三頁。

5　北原保雄編『全文全訳古語辞典』小学館　二〇〇四年。【摺り裳】項。

6　竹鼻績『今鏡』（下）全訳注　講談社　一九八四年。打聞　第十　敷島の打聞〔三六三〕。五二二、五二三頁。

7　竹鼻績『今鏡』（下）全訳注　打聞　第十　敷島の打聞〔三六三〕。五二五～五二七頁。【補説】より。

8　『日本国語大辞典　第二版』小学館　二〇〇〇年。【菖蒲葺】項。

9　拙稿「藤原実政考」『古代中世文学論考』第38集　新典

社　二〇一九年。一三六、一三七頁。

10 国立国会図書館デジタルコレクション所収・校訂増補五十音引　国学院編『勅撰作者部類』六合館　一九〇二年。二〇六頁。

11 小林祥次郎「あやめ　――季語遡源――」『小山工業高等専門学校研究紀要』№28　一九九六年三月。二〇四頁。

12 株式会社古典ライブラリー「日本文学WEB図書館」所収、「和歌・俳諧ライブラリー」データベース検索より。「花しょうぶ」は、〔花しょうぶ、花さうぶ、はなしょうぶ、はなさうぶ〕、「花あやめ」は、〔花あやめ、はなあやめ〕、「あやめ」は〔菖蒲、あやめ〕で検索した。それぞれ句検索、語句検索の両方を和歌・俳諧問わず行った。

13 久保田淳監修　石川一・山本一著「和歌文学大系58」『拾玉抄（上）』明治書院　二〇〇八年。三一七頁。

14 長谷川端「新編日本古典文学全集56」『太平記③』小学館　一九九七年。巻第二十一「覚一真性連平家の事」四四頁。

15 佐佐木信綱『日本歌学大系』第一巻　文明社　一九四〇年。所収『俊頼髄脳』、二三〇頁。

16 監修／徳川宗賢　編集委員／徳川宗賢・佐藤亮一　基礎資料収集／大岩正仲　編／小学館辞典編集部『日本方言大辞典』小学館　一九八九年。〔かつみ〕項。

17 『デジタル大辞泉（ジャパンナレッジ）』〔風俗歌〕項／【底本】監修／松村明　編集委員／池上秋彦・金田弘・杉崎一雄・鈴木丹士郎・中嶋尚・林巨樹・飛田良文　編集協力／曽根脩『大辞泉 第二版』小学館　二〇一二年。

18 竹鼻績『今鏡』（下）全訳注　打聞　第十　敷島の打聞〔三六三〕。五二五頁。【補説】より。

19 小林氏前掲論文（注11）。一九九、二〇〇頁。

20 小沢正夫・松田成穂「新編日本古典文学全集11」『古今和歌集』小学館　一九九四年。巻第十四　恋歌四、二六三頁。

21 木下正俊『萬葉集全注』巻第四　有斐閣　一九八三年。【注】三〇八頁。

22 『日本大百科全書（ニッポニカ）』小学館　一九九四年。〔カキツバタ〕〔ノハナショウブ〕項。

23 改訂新版『世界大百科事典』平凡社　二〇一四年。〔マコモ〕項。

24 近江源太郎監修　ネイチャー・プロ編集室構成・文『色の名前』角川書店　二〇〇〇年。八二頁。

25 木船重昭『後撰和歌集全釈』笠間書院　一九八八年。一〇九、一一〇頁。

26 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『日本人名大辞典』講談社　二〇〇一年。〔良岑義方〕項。

27 注(25)に同じ。

28 青木賢豪・家永香織・久保田淳・辻勝美・吉野朋美「和歌文学大系15」『堀河院百首和歌』明治書院　二〇〇二年。五二頁。

29 「新編日本古典文学全集9」『萬葉集④』小学館　一九九六年。三九二一番歌・一五九頁、校注より。

30 新編日本古典文学全集9」『萬葉集④』。三八八五番歌・一三八頁、校注より。

31 福島千賀子「『万葉集』における遊猟の歌　――薬猟を中心に」『日医大基礎科学紀要』第二号　一九八二年二月。十七、十八頁、二七・二八頁。福島氏は、該当部において、杉山二郎「薬狩考」（『朝鮮学報』第六十一輯昭和四六年　九九頁）、及び、和田萃「薬猟と『本草集注』」（『史林』六一巻三号　一九七八年五月）、各氏の論を参考されている。

32 福島氏前掲論文（注31）。二八頁。

33 久保田淳・馬場あき子編『歌枕歌ことば大辞典』角川書店　一九九九年。〔杜若〕項。

34 澤瀉久孝『萬葉集注釋』巻第四　中央公論社　一九五九年。四五二、四五三頁。旧字体を一部新字体に改めた。

35 升田淑子「万葉思ひ草　三　――をみなへし幻想――」『学苑』七六九巻　二〇〇四年十一月。八一頁。

36 伊藤博『萬葉集釋注』二　集英社　一九九六年。五九六、五九七頁。

37 阿蘇瑞枝『萬葉集全歌講義』第2巻　笠間書院　二〇〇六年。六四二頁。

38 中西進「万葉論集　第五巻」『万葉史の研究（下）』講談社　一九九六年。「十一　女歌　第一章　天平の女たち四・女郎群」二八三頁。

39 『群書類聚』巻第百七十七　所収「大中臣系図」百十九頁。〔清麻呂〕項に「母多治比志麻呂真人女」とある。

40 上田正昭・西澤潤一・平山郁夫・三浦朱門監修『日本人名大辞典』講談社　二〇〇一年。〔大伴家持〕項。

41 『尊卑分脈』巻二。（四一八頁）。

42 神野志隆光『万葉集をどう読むか――歌の「発見」と漢字世界』東京大学出版会　二〇一三年。九章より。